

漢語名詞とスルが構成する2種類の述語の交替

松岡 知津子

(2004年9月30日受理)

The alternation of two types of predicates with Sino Japanese nouns

Chizuko Matsuoka

The aim of this paper is to make clear about the alternation between the two types of predicates “Sino-Japanese noun + *wo* + *suru*” and “Sino-Japanese noun + *suru*”. By introducing the concept of “involvement into the event”, it was made possible to explain the cases with experiencer subjects that remained unclear in previous studies. It was shown that the Sino-Japanese nouns in “Sino-Japanese noun + *wo* + *suru*” construction have the feature of strong involvement into the event.

Key words : Sino-Japanese noun, alternation, experiencer, involvement into the event

キーワード：漢語名詞、交替、経験者、事象への関与

1. 目的と範囲

「スル」は、和語名詞、漢語名詞など全ての語種の名詞と直接結びつく生産性の高い動詞であり、日本語母語話者によって数多く使用される。また、日本語学習者においては以下のような誤用が見られ、その使用が難しいと考えられる。〈 〉は誤用が見られた学習者の母語を表す^{注1}。

例：*意図をする(意図する) 〈中国語〉

*参考する(参考にする) 〈韓国語, 中国語〉

本稿では、上記の「意図する」⇔「*意図をする」のような例について、どのような漢語名詞を先行要素とするときに、「漢語名詞+スル」が「漢語名詞ヲ+スル」と交替するかについて検討する。

なお、本稿では「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」が表す意味内容については「部屋を掃除する」と「部屋の掃除をする」のように、日本語母語話者にとってほとんど差異が感じられないようなものと、「就職を世話する」と「就職の世話をする」のよ

うに、差異が感じられるものがある。しかし、本稿では、これらの意味の違いまでは踏み込まず、これらの表現の違いは等価であるという前提で考察を行う^{注2}。また、名詞部分とスルの結合だけを問題とし、「漢語名詞+スル」「漢語名詞ヲ+スル」を形成するその他の文成分(名詞句など)は考察対象には含まないことにする。

2. 先行研究

2.1. 「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替に関する先行研究

「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替について議論したものに、「意志性」「語彙的アスペクト」「非対格性」といった観点から研究が挙げられる。以下では、これらの観点から「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替現象について議論した研究についてその主張を見ていく。

2.1.1. 田野村(1988)^{注3}

田野村(1988)は、「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」が交替しうような漢語名詞の性質について、まずその漢語名詞の主語に意志性があることが必要であると述べている。

(1) 警察はジュースの検査をした。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：水町伊佐男(主任指導教員)、江端義夫、

町博光、白川博之、酒井弘、

浮田三郎(国際協力研究科)。

(2) 議会はその議案の採決をした。

以上の(1), (2)は主語が意図的に行う動作であるため、「漢語名詞ヲ+スル」が成立する。しかし、以下の(3), (4)では、主語が意図的に行う動作ではないため、「漢語名詞ヲ+スル」が成立しない。

(3) *警察は毒物の検出をした。

(4) *議会はその議案の可決をした。

また、田野村(1989)は、し始め・し終わるような性質であることが必要であると述べている。

(5) 検査し始める, 検査し終わる→検査をする

(6) 採決し始める, 採決し終わる→採決をする

(7) *開始し始める, *開始し終わる→*開始をする

以上の例において、し始め、し終わるような動作である「検査」「採決」は「検査をする」「採決をする」が可能になるが、「*開始し始める, *開始し終わる」が不可能な「開始」は「開始をする」が成立しない。

田野村は、さらに、心理的なことを表さないことが必要であると言う。即ち、心理的なことを表す以下の例は、「漢語名詞ヲ+スル」が成立しない^{注4}。

(8) ?百年後の社会の空想をする

(9) ?関係者の立場の考慮をする

以上で見てきた漢語名詞の性質のほか、田野村は「名詞がそれ自体「行う」ことを表すものである場合「名詞ヲ+スル」は不自然であると述べた。

(10) ?悪天候の中、離陸の敢行をした

(11) ?政策の実施をする

2.1.2. Uchida&Nakayama (1993)

Uchida & Nakayama (1993)は、「名詞+スル」がVendler (1967)の分類における行為/達成動詞となるような漢語名詞である場合、「漢語名詞+スル」は「漢語名詞ヲ+スル」と交替し、「漢語名詞+スル」が到達/状態動詞となるような場合には「漢語名詞ヲ+スル」が成立しないと述べている。

(12) 行為/達成動詞の場合

a. ジョンは3年の間DNAを研究した

b. ジョンはDNAを研究している (動作の継続)

c. ジョンはDNAの研究をした

(13) 到達/状態動詞の場合

a. *授業が1時間の間開始した

b. 授業が開始している (結果の状態)

c. *授業が開始をしている

(12) (13)のaにおける「~の間」という表現によって漢語名詞が修飾されうる場合、その漢語名詞は持続性を持つと解釈されることから、行為/達成動詞であるということが出来る。すなわち、「3年の間研究をした」という表現が成り立つ(12a)は行為/達成動

詞であり、「*1時間の間開始した」が非文となる(13a)は到達/状態動詞となる。

また、(12) (13)のbにおける「~ている」が漢語名詞と結びついて動作の継続を表すような(12b)の場合は行為/達成動詞となり、「~ている」が結果の状態を表す(13b)は到達/状態動詞となる。

これら2種類のテストによって行為/達成動詞であると判断された「研究する」は、「研究をする」と交替することができ、一方、到達/状態動詞であると判断された「開始する」は「*開始をする」ということができない。

2. 1. 3. 影山 (1993)

影山(1993)は、名詞部分が非対格性を持つような場合、「漢語名詞ヲ+スル」は成立しないと述べている。

非対格性とは、自動詞を二分する概念で、意図を持たず、受動的に事象に係わる対象(Theme)を主語にとり、その主語が他動詞文の目的語位置に現れるような自動詞で非意図的事象を表す非対格自動詞と、意図的に動作を行う動作主(Agent)を主語にとるような非能格自動詞に分けられるとされている(影山1993)。影山によると、この概念は漢語名詞にも適用できるとされており、以下のような例が挙げられている。

(14) 非能格名詞の場合

a. 家族そろって食事をすることは滅多にない。

b. 離婚をする

(15) 非対格名詞の場合

a. *持っていたピストルが暴発をした

b. *老人が階段で転倒をした

(14)のような非能格名詞の場合、「食事をする」「離婚をする」が成立するが、(15)のような非対格名詞の場合は、「*暴発をする」「*転倒をする」が成立しない。

2. 1. 4. 平尾 (1995)

平尾(1995)は、「シヨウ, シタイ」などと共起することができる漢語名詞は意志性が高いと判断し、高い意志性を持つ名詞が「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替を許すとしている。

(16) 勉強シヨウ, 勉強シタイ→勉強をする

(17) 選択シヨウ, 選択シタイ→選択をする

(18) *堆積シヨウ, *堆積シタイ→*堆積をする

以上、(16) (17)のように「~シヨウ」「~シタイ」と共起し、意志性が高いと判断された「勉強」「選択」は「勉強をする」「選択をする」を許すが、「~シヨウ」

「～シタイ」と共起しないため、意志性を持たない「堆積」は、「*堆積をする」を許さない。

2.2. 先行研究相互の関係

以上の先行研究をみてみると、大きく2つの観点に分けることができる。

ひとつは、田野村(1988)、平尾(1955)にみられる意志性である。田野村、平尾によると「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」が交替するような漢語名詞は意志性を持つという。これは、影山(1993)の主張とも深く関わる。非対格性の概念とは、ある統語現象を命名したものであるが、その要因には意志性と語彙的アスペクトが深く関与すると言われている。意志性に関しては、意志性を持たないものが非対格性を持つとされているので、田野村、平尾の主張と重なる部分が多いと言える。

2.1.では、意志性の観点のほかに語彙的アスペクトという観点も出てくる。これは主に田野村とUchida & Nakayamaで主張されていることである。田野村では「漢語名詞+スル」が完結性(完了性)を持つことが必要だと述べている。一方、Uchida & Nakayamaでは、漢語名詞+スルが持続性という語彙的アスペクトを持つことが必要であると述べる。さらに、非対格性の仮説では意志性を持たないことに加えて「完了性を持つ」ということがその要因として考えられているため、非対格性の仮説も語彙的アスペクトの観点に関わると考えることができる。

3. 先行研究の問題点

本節では、以上でみた先行研究の主な問題点について検討する。

3.1. 田野村(1988)

まず、田野村の問題として挙げることができるのは、田野村の挙げたそれぞれの規準がどのような関係にあるのかが明確でないという点である。また、それぞれの規準に以下のような反例が存在する。漢語名詞が意志性を持たなければならないとする主張の反例としては、「失敗」「遅刻」が心理的なことを表す漢語名詞は「漢語名詞ヲ+スル」を許さないという主張の反例としては、「決意」「誤解」「反省」などが挙げられよう。以下に、実例を示す。

(19) 決意

二人は闘病と新しい生命の誕生に、手を携えて取り組む決意をする一。(佐2002/08/31)

(20) 誤解

やや刺激的すぎるタイトルで誤解をする人もあるか

と思うが…(佐1995/03/26)

(21) 失敗

まだコンピュータの操作が良く分からず、うまくデザインがかけなくて失敗をすることも何度もありません。(佐1998/02/06)

(22) 遅刻

ある学校では、遅刻をすると校門の前で正座をさせられるらしい。(佐1999/02/06)

(23) 反省

「どんなに凶悪な事件を起しても反省をすれば命を永らえられるのか」…(佐2000/06/07)

3.2. Uchida & Nakayama (1993)

「名詞+スル」が行為/達成動詞でも「名詞ヲ+スル」が成立しないような例が存在する(*実行をする、*刊行をする、*感激をする、*感嘆をするなど)。また、「名詞+スル」が到達/状態動詞となる場合でも「名詞ヲ+スル」が成立する場合がある。(失敗、遅刻など)。

3.3. 影山(1993)

非対格性を測るさまざまなテストが提唱されているが、そのテスト結果が一致していないため非対格性を測ることが難しく、非対格性と「名詞+スル」と「名詞ヲ+スル」の交替現象の関係を検証することが難しい。また、非対格性とは事象を表したものであり、「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替の特徴を記述することにはなっても、原理を説明することにはなっていない。

3.4. 平尾(1955)

3.1.の田野村の問題点でもみたように、「失敗」や「遅刻」のように意志性を持たない名詞でも「名詞ヲ+スル」が成立することがある。逆に「殴打」「毒殺」のように、主語が意志性を持って行うような動作であつても「名詞ヲ+スル」が成立しないような例もある。

以上をまとめると、意志性や語彙的アスペクトの観点はどの研究にも共通して重視されており、これらの観点を含めることで、かなりの程度まで「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替現象について説明することができることが分かった。しかし、一方で田野村の問題点として例を挙げたように、「決意をする」「誤解をする」「失敗をする」など依然として説明がつかないような漢語名詞が存在することが分かる。そしてこれらは、その他の先行研究においても同様に説明がつかない漢語名詞である。よって、これらの先

行研究の問題点を解決する必要がでてくる。

4. 経験者の概念の導入

先行研究に共通してみられた問題となる漢語名詞、すなわち漢語名詞の主語に意志性がなく「漢語名詞＋スル」が到達／状態動詞となるようなものには「安心」、「怪我」、「後悔」、「誤解」、「失敗」、「昇進」、「遅刻」、「発見」、「反省」のような漢語名詞がある。これらの漢語名詞は、主語が必ずしも意志を持たなくても事象が成立する。また、「安心する」「怪我する」という事象には時間の幅がないため、先行研究の主張に従うと「安心をする」「怪我をする」という表現は成立しないことになる。しかし、以下のような実例が存在し「漢語名詞ヲ＋スル」が成立することが分かる。

(24) 安心

周囲もほとんど同じで、自分が周りと同じであることに安心をする時代だ。(佐1994/12/26)

(25) 怪我

道案内なしに突き進むと怪我をする。(佐2000/10/15)

(26) 後悔

とても怖いテーマで、引き受けてから後悔をしている。(佐1999/11/27)

(27) 誤解 (再掲)

やや刺激的すぎるタイトルで誤解をする人もあるかと思うが…(佐1995/03/26)

(28) 失敗 (再掲)

まだコンピュータの操作が良く分からず、うまくデザインがかけなくて失敗をすることも何度もあります。(佐1998/02/06)

(29) 昇進

女性や少数民族が雇用され、昇進をしてきても、ある所まで来るとガラスの天井が張られていてその先には進まないことをいう。(佐1994/08/17)

(30) 遅刻 (再掲)

ある学校では、遅刻をすると校門の前で正座をさせられるらしい。(佐1999/02/06)

(31) 発見

会員の一人は、「六月末に佐賀で開催されるワンデイワークショップで体験学習しながら生き方の発見をしたい」と楽しそうに話していた。(佐2000/06/13)

(32) 反省 (再掲)

「どんなに凶悪なこと件を起しても反省をすれば命を永らえられるのか」…(佐2000/06/07)

以上の漢語名詞には、先行研究の主張である「意志

性」も「事象の時間幅」もないが、「漢語名詞ヲ＋スル」が成立する。これらの例に共通してみられる要因は何だろうか。それは「経験者の解釈を受ける主語の存在」という概念を適用すれば説明が可能である。経験者とは、井上(1976, pp40-46)の意味格の定義によると、「ある行為、または出来事と関わり合いを持つ、あるいは経験する有生名詞句の格で、感情を経験する有生名詞句もこの格をとる」というものであり、具体的には「気づく」のような知覚動詞、「悩む」のような心理動詞、「熱い」のような感覚述語の主語、そして、「勇二は教師に殴られて前歯を折った」の「勇二」のような経験者主体の他動詞文の主語といった場合がある。井上(1976)に基づいて、「経験者」の特徴をまとめると以下ようになる。

1. 無生主語にならないこと
2. 非意図性の解釈が可能で、「動作主文脈」に入ることができないこと
3. 心理・感覚・知覚動詞の主語となるものか状態変化主体の他動詞文の主語であるかのどちらか一方を満たしていること

先行研究では説明できないような漢語名詞でも、主語として以上3つの特徴を持った経験者をとるものであれば、(19)～(32)で見たように「漢語名詞ヲ＋スル」を形成することができる。

5. 事象への関与の強さ

それでは、なぜ経験者を主語にとるような漢語名詞は「漢語名詞ヲ＋スル」を成立させることができるのであろうか。「勉強、練習、研究」といった先行研究で説明が可能な漢語名詞とどのような共通点があるのだろうか。

筆者はそれを「事象への関与の強さ」とであると考え。「事象への関与」が強いと判断される場合には二つの場合がある。ひとつは、先行研究で説明がつくような漢語名詞のことで、「彼は3時間、一所懸命に勉強した」のように、主語が意志的に行い、その事象に持続性があるような場合である。この場合、問題の事象は主語の意志によって引き起こされるので、主語の「事象への関与」が強いのは当然である。もうひとつは、筆者が本稿で指摘したような漢語名詞で、「彼は見知らぬ人に殴られて怪我をした」というように、主語には全く意志性や主体性が感じられないが、主語が所有する体あるいは精神などが事象の成立に関与し、その結果が主体に返ってくる、すなわち再帰性を持つような場合である。これらの場合は、主語が意志や主

体性を持たなくても事象の成立と結果の先行研究で指摘されていた漢語名詞に加え、受動的であっても事象に強く関与していると判断されるような場合（経験者）に「漢語名詞ヲ＋スル」が成立する。

では、この「事象への関与」が高いと判断される漢語名詞が実際に「漢語名詞ヲ＋スル」を許すかどうか見ていくことにする。まず、前者のような場合は、「責任を持って～する」あるいは「～したのは自分の責任だ」といった、自らの意志で事象の成立を左右できるような表現が成り立つと考える。

また、後者のような場合は、事象としては自然現象によって引き起こされたような場合であっても、「自分が～したのは自分の努力のお陰だ」「自分が～したのは自己努力の賜物だ」「自分が～したのは自分の理解力が悪かったからだ」といった表現と共起できるなら、結果が主体に返ってくると解釈され、前者同様「事象への関与」があると考えてよいと思われる。

よって以下では、「事象への関与」すなわち自らの意志で事象の成立を左右できるような場合と、再帰性をもち、結果が主体に返ってくるような場合についてテストしていく。

5.1. 意志性をもち行為／達成動詞を形成するような漢語名詞

それではまず、既に先行研究においても説明が可能であった漢語名詞が事象に対する責任を有するかどうかをみる。以下では、「責任を持って～する」という表現と共起しうるかどうかによって、主体が自らの意志で事象を左右できるかどうか、すなわち事象への関与がみられるかどうかをテストする。

(31)

- a. 練習：責任を持って勉強する
- b. 検討：責任を持って検討する
- c. 運転：責任を持って運転する
- d. 研究：責任を持って研究する
- e. *暴発：*責任を持って暴発する
- f. *左右：*責任を持って左右する
- g. *堆積：*責任を持って堆積する

以上をみると、先行研究において説明が可能であった漢語名詞に関しては「責任を持って～する」という表現と共起しうることから、以上の漢語名詞の主語は「事象への関与」が見られると考えるとよい。

先行研究では説明ができなかった例、すなわち意志性の観点からも語彙的アスペクトの観点からも先行研究とは一致しないような漢語名詞については次項で検討する。

5.2. 意志性を持たず到達／状態動詞を形成するような漢語名詞

以下に、先行研究では説明できなかった漢語名詞、すなわち意志性も事象の時間幅も有さないような漢語名詞についてみていく。

(32)

- a. 昇進：自分が昇進したのは自分が努力したからだ
- b. 発見：自分が発見したのは自己努力の賜物だ
- c. 遅刻：自分が遅刻したのは自分が早いバスに乗らなかったからだ
- d. 誤解：自分が誤解したのは自分の理解力が悪かったからだ
- e. 失敗：自分が失敗したのは自分が確認を怠ったからだ
- f. 怪我：自分が怪我したのは自分の不注意のせいだ
- g. 感激：*自分が感激したのは、自分の努力のお陰だ
- h. 驚嘆：*自分が驚嘆したのは、心の準備が足りなかったせいだ

(32)の例をみると、(31a-b)のように意志を持つて事象を左右することはできなくても、自分の努力によってその結果が自分に返ってくるようにできたり、(32c-f)のように、注意していればある程度避けられたかもしれない事態が主体に返ってきたりするという「事象への関与」がみられる。

以上から分かるように、(31)と(32a-f)ではそれぞれテストによって「事象への関与」が強いと考えられ、それらの漢語名詞は「漢語名詞ヲ＋スル」が成立する。そして(32g-h)において、「感激」「驚嘆」では事象が主体に返ってこないことから、これらの漢語名詞が再起性を持たないことが分かる。「事象への関与」が低いこれらの漢語名詞は、「感激する」「驚嘆する」を許しても「*感激をする」「*驚嘆をする」と交替しないことが分かる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、「漢語名詞＋スル」と「漢語名詞ヲ＋スル」の交替が成立する条件について検討した。先行研究で述べられていた「主語が意志性を持つ漢語名詞」と「漢語名詞＋スルが表す事象が時間幅を持つ」という場合と、これらでは説明がつかなかったような場合を「事象への関与の強さ」という観点で包括的に捉えることで、「漢語名詞＋スル」と「漢語名詞ヲ＋スル」

の交替現象が説明できることを明らかにした。

一方、本稿では取り上げなかったが、「ピアノ発表会の練習をする」「*ピアノ発表会を練習する」における「ピアノ発表会」のように、名詞句を加えることによって「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の交替現象に差が出てくるような場合がある。このような場合について、「漢語名詞+スル」と名詞句との関係を考えていきながら、より広い範囲における「漢語名詞+スル」と「漢語名詞ヲ+スル」の関係について考えていく必要がある。

注

- 1) 文法性の判断は基本的に筆者が行い、判断がつきにくい場合には数名の日本語母語話者に判断してもらった。そして以下のような記号を用いて表した。
* : 文法的に明らかに不適切である場合
? : 文法的には文法的には不適切であるとはいえないが、不自然である場合
- 2) 「就職の世話をする」と「就職を世話する」の例について、数名の日本語母語話者によると前者は「就職活動全般に関わる世話をする」という意味であり、最終的に就職できるかどうかまでは表していないと捉えられる場合が多かった。一方、後者は「必ず就職できるように取り計らった」と捉える場合が多かった。
- 3) 田野村 (1988) では、本稿で見る規準のほかに「動作対象に対する別の動作・行為の表現が後続する同一の文脈においては、VN+スルの方がふさわしい」として、「荷物の梱包をして弁当を作った」「?荷物の梱包をして送った」のような例を挙げている。しかし、1.でも述べたように、本稿では漢語名詞とスルの結びつきだけを考察の対象とするため、ある文脈で「漢語名詞ヲ+スル」が成立するの

であれば「漢語名詞ヲ+スル」は成立するととらえる。

- 4) 田野村 (1988) では「?空想をする」「?考慮をする」は不自然だとされているが、実際には「ゆっくり読書にふけったり、たっぷりと空想をする中で子どもは夢をはぐくむとと思っているが。(佐1999/02/28)」「(2) 航空自衛隊が対応措置を実施する区域は、(1)と同様の考慮をして、以下の場所または地域を指定 (佐2003/12/19)」という実例も存在する。しかし、確かに田野村の言うとおりの心理的なことを表す「感激、感嘆、驚愕」などは「名詞ヲ+スル」を許さない。

参考文献

- 天野みどり (1987) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 pp.1-14.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・下』大修館書店.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 田野村忠温 (1988) 「『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』」『日本語学』明治書院 pp.70-80.
- 平尾得子 (1995) 「VNガスルとVNスルとVNヲスル—サ変動詞語幹と構文的制約—」『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』くろしお出版pp.89-98.
- Uchida, Y. and Nakayama, M. (1993) "Japanese verbal noun constructions," *Linguistics* Vol.31-4, pp623-666.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics and Philosophy*, Ithaca: Cornell University Press.

用例出典

佐賀新聞記事データベース→ (佐)